

平成20年度「産業社会と人間」・「産業理解」実践報告

1年次会 加藤敦子 金城幸廣 中井毅 丹羽美由紀 川上有正
大津展子 勢田歩美 岡 聖美 福原行也

総合学科の入り口で、本校生徒は「産業社会と人間」・「産業理解」に出会う。その学習項目を一つひとつ消化するうち、入学以前はあまり意識しなかったであろう自分の在り方や社会全体の在り方について考えをめぐらせるようになる。そして、生徒は変わっていく。やがて、劇的に変わっていく。本校総合学科14年間の歩みの中で蓄積されたノウハウという恩恵を受けて、今年度第15期生も「産業社会と人間」・「産業理解」の予定していた授業を全て終了することができた。この1年間の実践を報告すると共に、どれだけの成果を上げることができたのかを検証する。

キーワード：自己の在り方、社会の在り方、将来の目標、履修計画の作成、自主的な学習、生活の充実

1. はじめに -TIMMSと「産社・産理」-

平成20年12月、朝日新聞は「学ぶ意欲、なお低迷」という見出しで、2007年実施の国際数学・理科教育動向調査(TIMMS)の結果を報じた。学力低下に歯止めがかかったとする一方、勉強に対する興味関心が依然低い数字であると分析していた。勉強が楽しいかという質問に対して「そう思う」「強く思う」と答えた生徒は、中学2年では数学で39%、理科で58%であった。これは参加国50カ国中下から3番目という数値であった。

この日本の生徒の学習意欲低迷という現象はもちろん今に始まったものではなく、前々回の1999年実施のTIMMSから毎回問題になっていた。文教政策は「ゆとり教育」から「学力重視」へシフトしているが、勉強に興味を持たないあるいは持たない「知離れ」現象は一向に変化していないようである。先程の朝日新聞はこの日の社説で、魅力ある授業がかぎであると述べ、教材や指導法の研究に力を注げる体制整備の重要性を訴えている。

この「知離れ」に対して個々の授業の質を高めることに異論はないが、教育制度、教育課程の面からこの問題に迫ろうとするのが総合学科である。学ぶ意味を見いだせないでいる現代の生徒に対して、生徒はこれまであまりしてこなかったであろう「生きる」意味を考えさせる授業が「産社・産理」(「産業社会と人間」「産業理解」を合わせた授業を本校では「産社・産理」と呼んでいる)である。自分と向き合い、総合学科を理解し、現代社会を理解し、将来の自分に思いを馳せる。この中で授業の意味を構築し2年次、3年次の時間割を作成する。時間割作成は暫定的なゴールであり、最終的には生き甲斐を見いだすことであり、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を持つことである。

総合学科は平成5年2月に文部省(当時)から出された「高等学校教育の改革の推進について(第四次報告)の概要」によって始まった。平成6年度から全国7校に始まり、現在は284校(H19統計)に達している。戦後後期中等教育の最大の改革と言われた総合学科の歩みも今年で15年になるが、まだまだ日本の風土に根ざしたものになっていない。この一年を振り返り総合学科の中核である「産社・産理」という科目が、学ぶ意味の発見や生き生きとした生活につながっているかを検証する。

2. 総合学科と「産社」

総合学科は、普通教科と専門教科を並行して学ぶ学科として平成6年度から制度化された。総合学科は高等学校教育改革の中心的な役割が期待され、文部科学省は、高等学校の通学範囲内に、総合学科を有する公立高等学校を少なくとも1校整備することを目標としてきた。

文部科学省は総合学科で行われる教育の特色として、①幅広い選択科目の中から生徒が自分で科目を選択し学ぶことが可能であり、生徒の個性を生かした主体的な学習を重視すること、②将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること、の2点を挙げている。

総合学科以外にも新しいタイプの高等学校の取り組みが行われている。例えば、総合選択制高校などがあげられる。総合選択制高校には、①普通科の中に人文・理数などの生徒の進路希望に応じた複数のコースを設置したもの、②工業、商業、家庭など複数の職業系専門学科が併置されたもの、③普通科と職業系専門学科を併置したものがあつた。上記①②③の本県・県立学校の事例として、①伊奈学園総合高等学校②新座総合技術高等学校③進修

修館高等学校などが挙げられる。

総合学科は一学科の取り組みであり、一方、総合選択制高校は学校全体の取り組みであるので、似て非なるものである。前記、進修館高等学校は「普通科」「総合学科」「工業科」を含む「総合選択制高校」である。本稿は総合学科について述べるものである。

高等学校学習指導要領では、自己の個性を発見し、将来の生き方や進路を考える学習を進めるために、「産業社会と人間」を原則履修科目として定め、すべての総合学科の生徒に履修させることとしている。

「産業社会と人間」の取り組みについて、インターネットで閲覧可能な高等学校の年間学習計画をいくつか概観する。

①北海道立北海道清水高等学校（平成17年度年間学習計画）

- 1) 自己と他者を見つめる・履修計画を立てる
オリエンテーション 進路（職業）適性検査 上級学校について 選択科目ガイダンス 系列体験授業 適性検査結果の見方 選択科目調査① 職業調べ街角インタビュー まとめ
- 2) 社会を見つめる・履修計画を立てる
働くことを考える 職場実習ガイダンス 選択科目調査② 社会人講話 職場実習
- 3) ライフプランを作る
ライフプランとは何か ライフプラン作成 ライフプランクラス発表 進路ガイダンス ライフプラン発表会 著名人講話 1年間のまとめ

②長野県立丸子修学館高等学校（平成19年度年間学習計画）

- 1) 自己理解
「産業社会と人間」って、何の授業？ とともに学ぶ仲間との出会い 自分って、なんだろう？
- 2) 職業理解
進路理解 職業人の講話を聞こう 就業体験事前学習 ～になるには調べ 進路理解・面談 就業体験学習（夏期休業中） 就業体験発表会 進路講話
- 3) 履修計画
先輩の話を聞こう 科目説明会 履修計画作成（フリーで） 系列ガイダンス 履修計画相談会 選択希望調査（第1～4次）
- 4) 社会認識
マスメディアがみた世界 旅行と地域社会 校外研

修オリエンテーション 校外研修（上級学校・企業等見学）・校外研修のまとめ

5) まとめ

ライフプランを作ろう 作成・提出 HR発表 学年発表会 産社のまとめ

③愛媛県立川之石高等学校（平成20年度年間学習計画）

1 学期)

総合学科・産社オリエンテーション 入学動機調査 社会人講話（生き方） エンカウンター 望ましい勤労観 職種研究 就業体験（校内果樹園） サツマイモの定植 職場見学

2 学期)

先輩は語る 職種発展調査 科目選択ガイダンス 科目説明・系列体験学習 サツマイモの収穫 松山地区上級学校見学 履修計画の作成 就業体験（校内技術指導） ライフプラン（自分史・将来の夢・目標）

3 学期)

履修計画の作成（変更確認） ライフプラン（クラス内発表会） ディベート 総合発表会 スペシャリストに学ぶ生活シミュレーション アンケート・未来へ向けて

各校の「産業社会と人間」の年間学習計画を概観すると、自己理解、職業・進路（社会）理解、履修計画の作成が大きな柱であることがわかる。それらの柱を達成するために、適性検査・ライフプランの作成、職業体験・社会人講話・上級学校訪問などが行われている。これらが「産業社会と人間」の授業内容のコアなるものと思われる。

本校では「産業社会と人間」および「産業理解」の2科目を「産社・産理」と称して実施しするようになって6年を経過した。毎年、1年次担任団を中心とする産社・産理委員会を組織し、授業内容の見直し等を行っている。本年度の具体的な授業計画、変更点については後述する。

近年、若年層の非正規雇用の増加は社会問題として様々な場面で取り上げられてきた。さらに昨年9月以降、金融危機が実体経済に甚大な影響をもたらす事態に至り、非正規雇用労働者の大量解雇が現実の問題となっている。また大学・高校卒業予定者の「内定取り消し」が明らかになるなど、雇用問題は一層深刻な局面を迎えて

いる。

平成20年12月18日に公表された OECD の報告書は、日本の若年層が正規雇用で就くことが困難であることを指摘している。また、報告書では、学校、特に高等教育機関は企業とのつながりを密にし、企業が求めるスキルを学生に与えるべきであるとしている。

このような情勢の中、将来の職業選択を視野に入れ、自己の進路への自覚を深めさせることを特色とした、総合学科、そしてその中心科目である「産業社会と人間」の役割がますます重要になってきていると考えられる。

【参考文献】

北海道立北海道清水高等学校HP

<http://www.shimizu.hokkaido-c.ed.jp/>

長野県立丸子修学館高等学校HP

<http://www.nagano-c.ed.jp/marukohs/>

愛媛県立川之石高等学校HP

<http://kawanoishi-h.esnet.ed.jp/>

Jobs for Youth:Japan (Organisation for Economic Co-operation and Development 18/12/2008)

3. 「産理」開発の経緯と教科「産業」の目標

本校は、「平成12年度～14年度 文部科学省研究開発学校」の指定を受け、「生徒の主体的な学習態度の育成を図るための総合学科におけるガイダンス的な教科・科目の開発研究および学習内容の総合化のための開発研究」を研究主題として、新教科「産業」およびそれに属する新科目「産業理解」（前述の通り、本校では「産理」と呼んでいる）の開発に取り組んだ。ニートの存在が表面化し始めた時代である。

その頃、高校生の意識について、日々の学習を単に目先の卒業や進学的手段としてしか捉えていない傾向があることが指摘されていた。また、学校で学習する内容が社会人として必要な基礎知識であり、社会生活を営む上で活かされ得るものだと認識している生徒が多くないことも指摘されていた。それが、学習意欲の減退や高校生活に対する逃避的傾向、さらには進路獲得に対する意識の低下へと繋がっていくのではないかと考えられていた。

そこで、学校と社会を結びつける学習活動が必要であると考えた。もちろん、現行の「産社」においても、社会人講話や職場実習は行ってきた。しかし、それだけでは社会全般に対する具体的な認識を十分に深めさせることができていないと言え難いと思われた。社会全体のガ

イドランスを担う新科目「産理」を履修させることによって、現代社会に対する認識を深めさせ、社会との関わりの中で自己を位置づける力や、社会全体の幸福を考え向上心を持って生きる力、それに社会規範意識や倫理性を育成していきたいと考えた。

まず、教科「産業」の目標を「産業に関する基礎的・基本的な理解や関心を高めさせ、産業と人間の関わりや、社会生活において産業が果たしている役割について広い視野を持って理解させるとともに、自らの体験を通して様々な問題に対処する力や、新たに創造する力を育てることにより、望ましい勤労観や職業観を育成する」と設定した。

「産業」の枠組みの中には「産社」「産理」、さらにそれらの発展科目である「起業基礎」を位置づけることにした。このうち、「産社」「産理」は1年次必修科目とし、「起業基礎」は2年次の必修科目として、教育課程の中に位置づけた。

「産社」においては、様々な体験や色々な立場の人々との交流を通して自己を見つめ直し、将来について考えた上で、履修計画を作成させている。それに対して「産理」では、産業や社会全般についての見識を深めることを主眼におきつつ、産業社会の中で生きる自分の将来を展望させることを目指している。

このようなカリキュラムの中で、高校入学以前はあまり意識しなかったであろう社会人としての責任ある「生き方」について認識を深めさせ、いずれひとりの社会人として生きていくために、今何を学ばなければならないのかを理解させようと考えた。さらに、現実の社会の中でどんな「生き方」をし、どんな職業に就きたいのかを考えさせ、それを実現するためにはどんな進路をたどったらいいのか、そのためには今何をしなければならないのかということに気づかせようと考えた。（参考：本校研究紀要第43集）

平成20年度 産業社会と人間・産業理解 年間計画

月	日	産社・産理の 時間帯以外*	主 題	学 習 内 容
4	2	*	自己を見つめる	進適・職適(物品購入日)
	10	*	本校での学びを知る	『産社・産理』オリエンテーション(コミュニケーション・キャンプ)
	23		時間割を作成する	『産社・産理』オリエンテーション(目的、年計画)、 菜園づくり1(畝づくり・区割り・マルチがけ・種蒔き)、 R-CAP、系列授業見学・系列ガイダンス準備
	30	*		系列授業見学(3, 4限)
	30		職業や上級学校を知り、進路を考える	系列ガイダンス1、高校卒業後の進路(上級学校について)
5	7			系列ガイダンス2、科目選択について(ガイダンスブック配布)
	21			夢現塾(村田兆治先生講演会) 自分を知る(R-CAP振り返り)
	28			職業発見ガイダンス(JSコーポレーション)
6	4			科目選択予備調査入力、科目選択振り返り
	11		他者を知り、自分を振り返る	福祉入門・交流会準備1
	18			福祉体験(車椅子、アイマスク)
	25			副学長講話、菜園づくり(除草)、1学期の振り返り・夏休みの指導
7	9	*		進路バス見学会準備 社会人講話・職場実習準備
	11	*		進路バス見学会
	16	*	産業社会を理解し、生き方を考える	社会人講話・職場実習準備、バス見学会振り返り
	17	*		菜園収穫祭
	22~8/1	*		職場実習 職場実習振り返り(ポスターづくり)、バス見学会振り返り
8	27	*		産理1:産業と経済
	28	*		日銀・東証見学
9	3			職場実習振り返り(報告会)、日銀等見学振り返り、交流会準備2
	10			産理2:産業のしくみ、会社のしくみ(R-CAP関連教材を活用して)
	17			筑波大学見学準備、交流会準備3 産理3:産業の課題(環境、福祉)
10	8			筑波大学訪問
	15			筑波大学振り返り、聴覚特別支援師木先生講話、進路ガイダンス準備
	21	*		附属桐ヶ丘特別支援学校との交流会(1A)
	22			進路ガイダンス(高校生新聞社)
	29			産理4:環境と産業
11	4	*		附属大塚特別支援学校との交流会(1D)
	6	*		県立盲学校との交流会(1B)
	5			産理4環境と産業
	11	*		附属聴覚特別支援学校との交流会(1C)
	12			筑波大学の先生方の講義
	19		ライフプランを作成する	交流会振り返り報告会、ライフプラン作成・科目選択本調査準備
12	3			科目選択本調査入力 ライフプラン作成
	10			ライフプランクラス発表会
	17			研究大会準備
1	21			産理5:福祉と産業
	28			ライフプラン学年発表会、研究大会準備
2	19	*	産社・産理振り返り	研究大会で産社・産理に関する発表会、ポスター掲示
	25			産理6:これからの産業(情報化を中心に)、産社・産理振り返り
3				

* 菜園の手入れを適時行います
* 交流会準備を適時行います

4. 今年度の授業計画と変更点

次年度1年次の担任に決まると、早速「産社・産理」の準備に取りかかる。どんな新企画を取り入れようかと、夢が膨らみ心が躍る楽しい作業である。この頃、最初の社会人講話を元プロ野球選手の村田兆治先生にお願いする案が浮上した。夢や目標を持って頑張る日々がどんなに充実しているかということについて、力強く、そしておおらかに語って頂こうと考えたのである。幸い進路指導部との連携が、案の実現を後押ししてくれた。俄然楽しみが倍増した。次に、最初の進路ガイダンスは職業紹介に特化して、各分野20種程度の仕事を画像を交えて紹介する企画の採用を考えた。そしてそのまま「なるには相談会」に持ち込めば、科目選択のヒントを与えることができるのではないかと、夢はますます膨らんだ。さらに、「菜園づくり体験」も収量を増加させようと、畝づくりマルチ掛け農法を採用することを決定し、必要なものを発注した。

そんな風に心を躍らせ計画を練りながら思いを馳せるのは、新入生達のことである。思春期の心は傷つきやすく、いじめや不登校を経験してくる生徒も少なくない。そうした生徒たちにも、「産社・産理」の授業を通して多くのことに「気づき」、自分に合った科目選択をすることによって高校生活を謳歌してもらいたいと願って止まない。一人一人の心に響くようにと、きめ細かく計画を練っていく。これもまた、やりがいのある仕事である。

さて、本校における「産社」の学習内容のうち、総合学科立ち上げ当初から受け継がれているものは、以下の通りである。

進路適性検査・職業適性検査 菜園づくり体験 福祉体験
特別支援学校との交流会 系列ガイダンス 産業と職業
高校卒業後の進路 社会人講話 就業体験 履修計画作成
ライフプラン作成

これらの内容に、筑波大学と連携した内容が加わるようになって久しい。

次に、開発当初からほぼ毎年行われている「産理」の学習内容は、以下の通りである。

産業のしくみ、産業と経済、環境と産業、福祉と産業、
IT技術と産業

こうした本校における「産社・産理」のコアとも言うべき学習内容は基本的には変わらないが、社会情勢の変

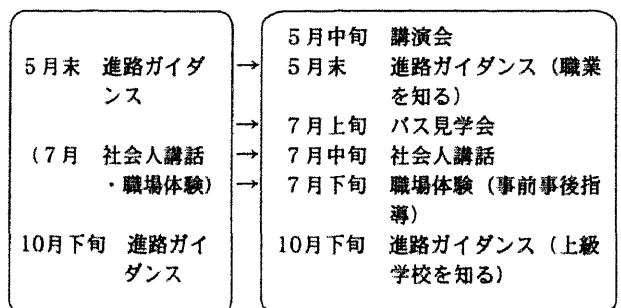
化や前年度までの反省を踏まえて、その年の「産社・産理」委員会が毎年少しずつ変更を加えている。今年度の主な変更点は、以下の通りである。

(1) 進路指導部との連携

「産社・産理」での取り組みは、本校のキャリア教育の中核をなしていると言える。そのためキャリア教育を中心となって推進している進路指導部との連携は非常に重要となってくる。例年、その必要性については十分認識されていたが、準備を始めなければならない前年度に、現分掌の仕事を行いながらそれぞれ次年度の計画を立てていくため、二者間で綿密な協議を重ねていくことは困難な状況にあった。今年度は、「産社・産理」を担当することになっていた教員が進路指導部にいたこともあり、十二分に進路指導部と新「産社・産理」担当との間で次年度の内容について協議することができた。

一方で、文科省でも重要性を説いているインターンシップを、本校では「産社・産理」の中で、職場体験と社会人講話をセットにして行っている。生物資源・環境科学系列、工学システム・情報科学系列、生活・人間科学系列、人文社会・コミュニケーション系列の4つを抱えている本校にとって、すべての系列が満足する協力体験先を確保することはなかなか容易ではない。しかも毎年「産社・産理」の担当は年次団で構成されるため、そのほとんどが入れ替わりになり、協力先との連絡に関する引き継ぎが懸念されていた。2年前までは何年か続けて担当する教員がいたが、昨年「産社・産理」担当が総入れ替えになったため、問題は一気に表面化した。長年卒業生を中心をお願いしてきた協力先の確保が困難になったのである。そこで、協力を依頼していくこととなる企業や卒業生ともっとも太いパイプを持つ進路指導部がインターンシップを担当することになった。「産社・産理」のメンバーの一人ではなく、一分掌が引き受けることによって、引き継ぎ困難な状況を回避することができた。

これらのことから、今年度は連携のとれた行事を組み立てていくことが可能となり、進路指導部の協力による「産社・産理」の行事は以下のように充実した。



例年、1学期に将来を考える上で重要となる「職業を知る進路ガイダンス」、2学期には、自分が考えている職業に就くための進路選択の段階で、「上級学校を知る進路ガイダンス」を行っていた。今年度はそれに加えて、講演会、バス見学会（上級学校見学）を「産社・産理」の中に組み入れた。講演会は、進路選択において最初に夢を持たせる趣旨で、高校生新聞社・夢現塾の村田兆治先生をお願いした。内容の変更点として、「職業を知る進路ガイダンス」では、生徒にとってよりイメージがわかりやすいように職業の紹介をVTRで見せる方式を採用し、具体性を出すことに重点を置いた。また、社会人講話・職場体験を進路指導部の協力のもと行うことにより、たくさんの体験協力先の確保と事前事後指導の充実をはかることができた。

今年度は、「産社・産理」のメンバーの中に年次団プラス1名で進路指導部専任が入った。インターンシップに関しては、進路指導部のインターンシップ担当は協力先確保等のお膳立てをし、後の作業は「産社・産理」のメンバーにバトンタッチされるため、必ずしも進路指導部のメンバーがプラス1で入る必要性はないだろう。しかし、今後も行事を充実させていく上で進路指導部との連携は必須であるため、「産社・産理」の担当に2人以上の進路指導部のメンバーが入ることが望ましく、綿密な協議を重ねていくことは重要であると思われる。

（2）「交流会」に向けた取り組みの見直し

総合学科発足当時の平成6年度から変わることなく実施している取り組み内容に、「特別支援学校との交流会」がある。毎年の生徒の成長ぶりを見るにつけ、「交流会」が生徒に与える影響の大きさは疑う余地もないと確信しているため、今年度も迷わず交流会を実施することを決定し、前年度中に相手校との日程の調整に入った。しかし、相手校から、これまでの「交流会」の在り方を見直す必要を指摘された。過去の「交流会」における本校生徒の心構えが甘く、その意義に対する疑念が投げかけられたのである。『産社・産理』の運営は多忙を極めるため、ややもするとその準備が行き届かず、交流先の生徒や先生方に不快な思いをさせることがあったことも否めない。そこで、秋に設定した「交流会」に向けて、年度当初から段階を踏んで心構えを作り、準備していくことにした。

まず、6月に「福祉体験」の授業を実施した。これも総合学科発足当時から実施していることであるが、今まで同様「自分とは立場の違う人を知り、社会全体を見つ

め、自己を振り返る」活動として捉えると同時に、秋の交流会への心構えを作る最初の活動と位置づけて実施した。そのため単発で行うこともあったこの授業の前に、「福祉入門」と称して、障がいの定義やそれを取り巻く現状について講義し、障がいを持つということについて考えさせる時間を設けた。また、この時に交流会についても概要を説明した。

「福祉体験」として、1年次4クラス中2クラスには、車椅子で生活をされている社会人講師の先生をお招きし、講義をしていただき、車椅子で駅まで公道を走行する体験を行った。また、駅ではエスカレーターを車椅子仕様にして昇降の様子を見学させていただいた。別の2クラスは目に障がいのある社会人講師の先生に講義をしていただき、アイマスクをつけて駅前のモールまで行き、エスカレーターの昇降訓練を行った。車椅子に乗ったり、アイマスクをつけた状態で駅まで往復させたことも今年初の取り組みである。

この一連の授業の後、各クラスの「産社・産理」委員の生徒達を集めて、交流会の準備に入った。これは交流会直前まで続いたが、事前に委員が相手校へ赴き、打合せを行ったクラスもあれば、交流校の生徒を少しでも理解しようとして手話で自己紹介する練習をしたクラスもあった。また、お互い打ち解けるため、クイズやレクリエーションを準備したクラスもあった。こうした代表生徒による準備は、当然これまでも行われてきたことであるが、今年度は早めに準備に取りかからせることで準備期間の十分な確保に努めた。

一方、交流会に向けた授業として、交流の在り方について各自考えを書かせた後、クラスでそれを発表させる取り組みも行った。また、10月には交流校の先生をお招きして、特別支援学校に関する講義をしていただいた。

各クラスの交流先と交流時の主な活動は以下の通りである。

A組 筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校

1年生 11名（訪問）

食事をしながら自己紹介、授業参加、交流会

B組 県立盲学校

普通科1～3年生 11名（訪問）

本校主導のゲーム大会、盲学校主導の大縄飛び

C組 筑波大学附属聴覚特別支援学校

普通科 1～3年生 80名（訪問）

食事をしながら自己紹介、各クラスに入って

手話コーラス練習、発表会
 D組 筑波大学附属大塚特別支援学校
 1～3年生 23名(来校)
 グループごとにレクリエーション、農作業体験、会食、キックベースボール

平均値 4.275
 肯定率(5, 4) 84%

この結果からも明らかなように、「交流会」は生徒に多くの「気づき」をもたらす。それが本校での生活の原体験になっていくように思えてならない。

クラス毎に交流の内容が異なるので、1つの例として聴覚特別支援学校と交流したクラスを取り上げて、生徒の感想文(400字程度の自由作文)を見てみると、以下のような感想が見られた。

○交流校の生徒は障がいがあるだけで、僕らと同じ高校生だと思った。(9名)・・・項目1

○当たり前だと思っていた話せることは、実は幸せなことなのだと感じた(3名)・・・項目2

○交流校の生徒が明るく頑張っているのを見て、自分も頑張ろうと思った(5名)・・・項目3

()内の数字は同じ内容を書いた生徒数であるが、こうした感想に対して、同感か否かクラス全員に問うてみたところ、以下のような結果を得た。

項目1. 交流校の生徒は障がいがあるだけで、僕らと同じ高校生だと思った。

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
35人	2人	2人	0人	1人
87%	5%	5%	0%	3%

平均値 4.75
 肯定率(5, 4) 92%

項目2. 当たり前だと思っていた聞こえること、話せることは、実は幸せなことなのだと感じた

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
30人	6人	2人	1人	1人
74%	15%	5%	3%	3%

平均値 4.575
 肯定率(5, 4) 89%

項目3. 交流校の生徒が明るく頑張っているのを見て、自分も頑張ろうと思った

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
21人	13人	3人	2人	1人
52%	32%	8%	5%	3%

(3) 年間計画の組み立て

「産社・産理」の終盤で生徒は系列選択並びに科目選択を行う。各自が自らの意思で、2, 3年次の時間割を決定することになる。系列選択や科目選択をするためには、卒業時の進路やその先の将来の職業にまで想いを馳せなければならない。そのためには、「自己を見つめる」必要がある。「職業や上級学校について知り、進路を考える」必要がある。そして、「本校の学びを知り、時間割を作成する」必要がある。そのいずれを取っても、生徒には人生を左右するであろう一大事である。だから、短時間でできるはずがない。そこで、今年度の年間計画を立てる際、それらの要素を全て早い時期から計画に組み込むことにした。本校では、来年度の準備の都合上、6月初旬に科目選択予備調査を行っている。その前に「自分はどんな人間か」「将来何をしたいのか」「本校で何を学びたいのか」という疑問を投げかけたのである。

まず、「自己を見つめる」ことに関しては、R-CAPを含む2種類の進路適性検査・職業適性検査を実施し、その結果を用いた授業を行い、客観的データが示す自分のイメージと向かい合わせることで、自己を見つめるきっかけを作った。さらに、4月中には「菜園づくり」の体験学習を開始した。次に「職業や上級学校について知り、進路を考える」ことに関して、上級学校の紹介を含む高校卒業時の進路選択に関する授業や、職業発見ガイダンスを実施した。そして、「本校の学びを知り、時間割を作成する」ことに関しては、系列授業見学や系列ガイダンスや科目選択ガイダンスを行った。

過去の取り組みにおいて、これらの要素を一通り実施する前に科目選択予備調査に突入した年もあり、考える条件が揃っていないことに関する不安の声が聞かれることもあった。今年度はそうした反省を活かして、6月の予備調査と12月の本調査を軸に据え、バランスを考えた学習内容の配置に努めた。生徒たちは、早い時期に投げかけられた「自分はどんな人間か」「将来何をしたいのか」「本校で何を学びたいのか」という生き方に関する基本的な問いと、12月の本調査まで向かい合うこと

になった。年間計画を参照されたい。

さて、数年前にマスコミの取材を受けた時、本校の「産社・産理」の学習内容は福祉と農業関係の授業が多いことを指摘されたことがある。しかし、本校で実施している福祉体験や特別支援学校との交流会は、生徒を福祉分野の職業に誘うために実施しているわけではない。自分とは違う立場の人と交わることで、社会全体を捉えさせようとしているのであり、その上で自己の在り方を見つめ直し、その役割を考えさせようとしているのである。そして、産業活動を含むよりよい社会の在り方を考えさせようとしているのである。同様に、菜園体験も生徒を農業に誘うものではなく、菜園作りを通して食の安全や人間の基本的な生活に不可欠なものについて考えさせようとしているのであり、食の生産を含む社会の在り方考えさせようとしているのである。もちろん、福祉や農業の分野が自分に合っているかどうかを、体験的に学習させている機会でもあるが、上記のような意図があるから全生徒に必要な学習であると考えている。

実際に6月の科目選択予備調査と12月の本調査を比べると、系列選択に変更がなかった生徒が全体の78%、変更があったのは22%で、そうした生徒達も『産社・産理』の様々な学習を通して、真摯に自分を見つめた結果、変更を決意したのであった。そして、「生活人間科学系列」の保育・福祉モデル選択者の数も、「生物資源・環境科学系列」の生物資源モデル選択者数もほぼ変動はなかった。

(4) 「産社・産理」ノートの作成

英数国のような教科と違い「産社・産理」を専門とする教員はいないため、「産社・産理」担当者はその準備に多忙を極めることが多い。それを解消すべく、今年度は過年度の蓄積を基に「産社・産理」ノートを作成した。ノートといっても、線が引いてあるだけのノートではなく、書き込み式教科書形式のノートである。これによって、各授業前のワークシートや資料プリントの印刷の手間が省け、また、生徒の感想文の整理を効率よく行うことができ、「産社・産理」運営の効率化に大いに貢献した。

5. 指導のねらい

～今年度「産社・産理」委員の思い～

本校では、入学式翌日から3泊4日でコミュニケーション・キャンプを実施している。健全な集団作りを目指したキャンプで、アイス・ブレイク、マウンテン・バイ

ク走行、雪山のトレッキング、集団活動などから成る。キャンプそのものが「産社・産理」ではないが、夕食後には「産社・産理」の最初の講義が行われ、総合学科生としての心構えや本校の教育課程に関する説明がなされる。また、一つひとつの活動内容の意図も「産社・産理」のねらいや年次経営やHR経営の根幹に関連が深い。入学直後のまだ自分を出し切らない生徒たちに向けて、30Km超のマウンテン・バイク走行を実施した。困難なものから逃げずに、地道に努力し、達成する喜びを体験してほしいからである。

同キャンプでは、やはり夕食後の活動としてサイレント学習を行った。春期休業中に出しておいた課題を基にした確認テストをキャンプ最終日に実施することになっており、そのための学習時間を確保したのである。もちろん、それは同時に、この新しい集団で互いを信頼して学習活動が行えることを体験させるためでもあった。

このように、コミュニケーション・キャンプでは、困難なものに対する取り組み姿勢の形成を重視し、やがてそれは真面目に学習に取り組む姿勢へと繋がることを目指した。その目標はそのまま「産社・産理」の授業に受け継がれ、「自分はどんな人間か」「将来何をしたいのか」「何を学びたいのか」という難問に答えを出す姿勢へと繋がっていくことを期待した。さらに、社会に出た時に、やりたい仕事が与えられないから、人間関係が厳しいからと、すぐに転職を考えるのではなく、活路を見出すために、地道に日々の仕事に取り組むことができる勤勉な姿勢へと繋がって欲しいと考えている。

平成20年には、予想もしなかった金融危機が世界を席卷した。未曾有の社会不安がこの国をも飲み込んだ。巨大な国際社会はいつ何時予想だにしない難問をもたらすかもしれない。しかし、どんな時代が来ようとも、どんなに難問が山積しようとも、周囲の人々に優しい気持ちを持って接し、違いを理解した上で共によりよい社会を築いていける人間へと成長して欲しい。環境問題を含め、社会全体を視野に入れつつ、地道に課題に取り組める人材を育てていきたいと願って止まない。

6. 今年度の取り組みに対する評価

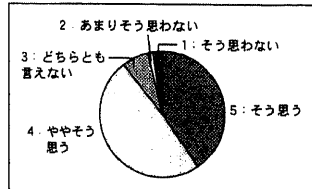
(1) アンケート分析結果から

調査項目：1) 自己分析

質問：自分をしっかり見つめ直すことができた。

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
64人	77人	11人	2人	4人
40.5%	48.7%	7.0%	1.3%	2.5%

項目平均	4.2
肯定率(5・4)	89.2
否定率(1・2)	3.8

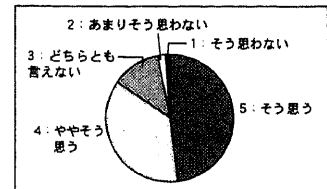


調査項目：4) 労働への積極性

質問：働くことに対する興味関心が高まった

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
75人	57人	19人	3人	2人
47.5%	36.1%	12.0%	1.9%	1.3%

項目平均	4.3
肯定率(5・4)	84.6
否定率(1・2)	3.2

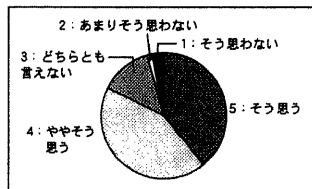


調査項目：2) 共生

質問：他者と助け合いながら生きていくことの価値を知ることができた。

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
62人	68人	21人	2人	5人
39.2%	43.0%	13.3%	1.3%	3.2%

項目平均	4.1
肯定率(5・4)	82.2
否定率(1・2)	4.5

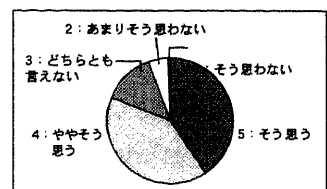


調査項目：5) 進路意識

質問：自分の人生設計について十分に考えることができた。

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
64人	64人	21人	8人	1人
40.5%	40.5%	13.3%	5.1%	0.6%

項目平均	4.2
肯定率(5・4)	81
否定率(1・2)	5.7

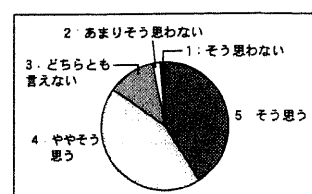


調査項目：3) 勤労観・労働観

質問：生産すること・働くことの大切さや喜び、または苦勞を知ることができた

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
65人	69人	19人	3人	2人
41.1%	43.7%	12.0%	1.9%	1.3%

項目平均	4.2
肯定率(5・4)	84.8
否定率(1・2)	3.2

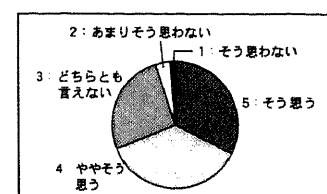


調査項目：6) 時間割

質問：人生設計を反映させて、最良の時間割を作ることができた。

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
51人	57人	41人	6人	2人
32.3%	36.1%	25.9%	3.8%	1.3%

項目平均	3.9
肯定率(5・4)	68.4
否定率(1・2)	5.1

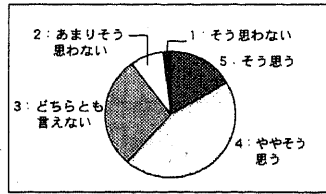


調査項目：7)日常的な積極性

質問：ものごとに主体的に取り組むようになった。

5：そう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない	2：あまりそう思わない	1：そうは思わない
26人	71人	45人	13人	3人
16.5%	44.9%	28.5%	8.2%	1.9%

項目平均	3.7
肯定率(5・4)	61.4
否定率(1・2)	10.1

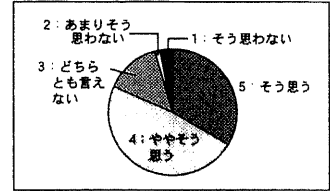


調査項目：10)産業社会の意識化

質問：社会にどのような産業や職業があるか知識が増え、産業社会に対する関心が高まった

5：そう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない	2：あまりそう思わない	1：そうは思わない
53人	76人	22人	2人	5人
33.5%	48.1%	13.9%	1.3%	3.2%

項目平均	4
肯定率(5・4)	81.6
否定率(1・2)	4.5

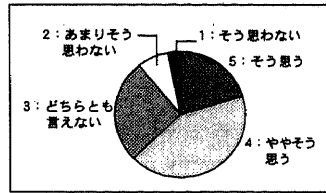


調査項目：8)日常的な問題意識

質問：ものごとに問題意識を持って取り組むようになった。

5：そう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない	2：あまりそう思わない	1：そうは思わない
32人	67人	42人	12人	5人
20.3%	42.4%	26.6%	7.6%	3.2%

項目平均	3.7
肯定率(5・4)	62.7
否定率(1・2)	10.8

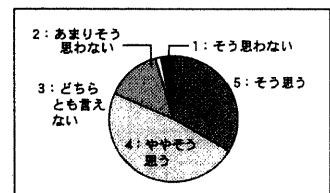


調査項目：11)自己開示

質問：自分の思いや意見を積極的に伝えられるようになった。

5：そう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない	2：あまりそう思わない	1：そうは思わない
53人	76人	22人	2人	5人
33.5%	48.1%	13.9%	1.3%	3.2%

項目平均	3.6
肯定率(5・4)	52.5
否定率(1・2)	11.4

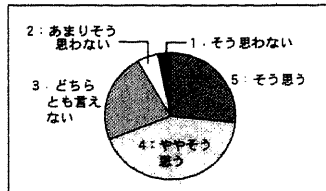


調査項目：9)社会への関心

質問：社会の中のできごとに関心をはらうようになった。

5：そう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない	2：あまりそう思わない	1：そうは思わない
42人	67人	36人	8人	5人
26.6%	42.4%	22.8%	5.1%	3.2%

項目平均	3.8
肯定率(5・4)	69
否定率(1・2)	8.3

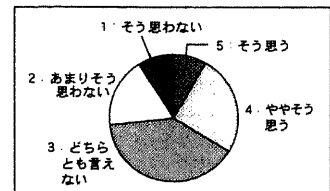


調査項目：12)文章表現

質問：文章を書くことが得意になった。

5：そう思う	4：ややそう思う	3：どちらとも言えない	2：あまりそう思わない	1：そうは思わない
13人	40人	62人	28人	14人
8.2%	25.3%	39.2%	17.7%	8.9%

項目平均	3.8
肯定率(5・4)	69
否定率(1・2)	8.3



「産社・産理」の授業に関するアンケート調査を、1年次生158名を対象に行った。質問項目1)の自己分析に対する評価は肯定率89.2%と高く、授業を通して自分としっかり向き合うことができた生徒達の様子がうかがえる。また、2)他者との共生や、3)勤労観・労働観、4)労働への積極的な意識、10)産業社会に対する関心、そして5)進路意識の肯定率も80%から85%と高い数値を記録しており、働くことを肯定的に捉え、他者と協調して生きていこうとする意識が高まったことが推測される。一方、6)時間割作成や、7)日常的な積極性、または8)日常的問題意識、あるいは9)実社会への関心となると、肯定率は60%台で、日常生活における実践的態度となると一定の向上は感じられるものの、まだ十分とは言えないことが推測される。さらに11)自分の意見を伝えることは50%台で、12)文章を書くこととなると30%台と低く、実際のスキルの伸びには結びついていないことが分かる。つまり、今年度の「産社・産理」の授業は、生徒の勤労観・労働観や進路意識、そして協調性といった精神的な向上に対して大いに貢献し、日常生活における実践的態度の向上への期待をもたらしたが、意思伝達能力や文章力といったスキルの向上をもたらすには至らなかったと考えられる。

さらに、1クラス、40名を対象に以下のアンケート調査を実施した。

調査項目：13) 学習の意味の認識

質問：高校での学習が将来役に立つと思いますか

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
18人	16人	6人	0人	0人
45%	40%	15%	0%	0%

平均値：4.1

肯定率：85%

調査項目：14) 生き生きとした高校生活

質問：高校生活は楽しいですか

5: そう思う	4: ややそう思う	3: どちらとも言えない	2: あまりそう思わない	1: そうは思わない
24人	9人	6人	0人	1人
60%	22%	15%	0%	3%

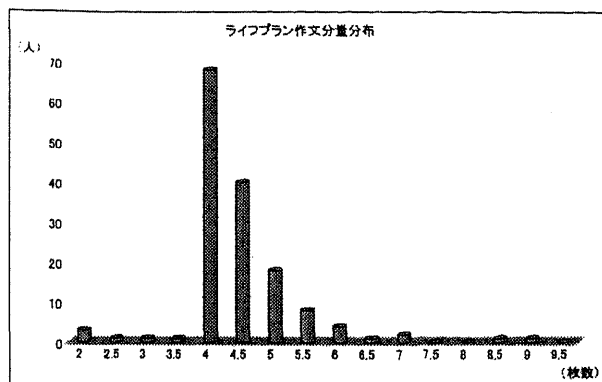
平均値：4.4

肯定率：82%

高校での学習が将来役に立つと思うかどうか問うたところ、肯定率は85%であった。また、高校生活が楽しいかどうか問うたところ、肯定率は82%であった。本校入学以前、不登校を経験している若干名の生徒が全員5と回答してきたことは、日々彼らを見守ってきた私達を安堵させた。この結果から見ても、「産社・産理」は学ぶ意味の発見や生き生きとした生活の実現にある程度の成果を上げたと言えよう。

(2) ライフ・プランの分析

ライフプランの作文量の調査を行った。



「産社・産理」の集大成とも言えるライフ・プランの作文は、最低限、原稿用紙の5枚目にさしかかっていることを条件に書かせた。本調査では、5枚目の3、4行であれば4枚、5枚目の半分前後書いた生徒は4.5枚というくりにカウントしてある。条件を出して書かせたので、4枚以上が大勢を占めるのは当然の結果だが、作文が得意な生徒ばかりではない生徒集団にあって、比較的難なくこれだけの枚数を書くことができたことは評価できる。「産社・産理」の授業では、一つの取り組みが終わるごとに、その内容を振り返らせて、文章を書かせている。従って、この結果は単独で出てきているものというより、「産社・産理」の授業の積み重ねからきている結果であると考えられる。本校では、外部学力テストをすると、英数に比べ国語の点数が高い傾向にあるが、それも、こうした取り組みの産物と言えよう可能性がある。

さて、内容に目を向けていくと、文章を書くことで自分の考えや気持ちを整理し、次の課題の発見へと繋がって行ったことが読みとれる。系列選択・科目選択するためには、自分の内面と向かい合わなければならない。そのためには、過去から今日に至る心の変遷を振り返る必要がある。心を動かすものは新しい知識や楽しい出来事ばかりではなく、時に苦難を伴う出来事であることもある。生徒のライフ・プランの中には、惜しげもなく過去

の辛い体験を赤裸々につづったものも多く見られた。それが聞いている仲間の共感を誘い、心を開かせることにもなった。事実、ライフ・プランの発表会は、各クラスとも大変感動的で、涙を流す生徒も多く見られたほどであった。

【ライフ・プラン】

(自由記述作文) 内容について分析した。(159名対象)

1. 将来の目標(就きたい職業)に関する記述があるか

具体的に書かれている	53%
方向のみ書かれている	40%
書かれていない(未定)	7%

ライフ・プラン作成時には93%の生徒が将来の目標をある程度定めていることがわかる。7%の生徒のケアが必要と思われる。

2. 系列選択が将来の目標(就きたい職業)と関連しているか

関連している	88%
関連していない	12%

88%の生徒が将来の目標を見据えて系列を選択したことがわかる。12%の生徒の中には、将来の目標が系列に属さない分野である場合も含まれているので、一概にマイナス要因だと判断するべきではないかも知れない。

3. 自己を見つめた過程に関する記述があるか

有る	98%
無い	2%

98%にも登る生徒が真剣に自己を見つめたことが伺える。2%の生徒のケアが必要と思われる。

4. 「産社」・「産理」の授業に言及しているか

している	47%
していない	53%

「産社」・「産理」の授業に言及していない生徒はむしろ、本校入学以前より系列や職業の希望があった生徒が多い。ライフ・プランの論旨に授業以上に必要な内容が含まれていたこともあり得る。よって、この結果をもって授業の善し悪しを判断するものではないと考えられる。

5. ライフ・プラン(高校卒業時の進路希望や取得希望資格等)に関する記述があるか

有る	78%
無い	22%

ライフ・プランがしっかりしている生徒が78%。22%の生徒のケアが必要と思われる。

(3) 授業最終日に実施した学習項目別・振り返りアンケートの結果分析

学習項目ごとに次のような調査を実施した。

①次の項目は【自分の在り方を考える上で参考になりましたか】。該当する番号を選んで下さい。(159名を対象に調査)

5:大参考になった 4:参考になった 3:どちらとも言えない 2:あまり参考にならなかった 1:参考にならなかった

区分	学習項目	平均値
産社	コミュニケーション・キャンプ	4.1
	道路適性検査・職業適性検査	4.03
	菜園づくり体験	3.4
	系列授業見学	3.98
	系列ガイダンス	4.1
	村田兆治先生講話	3.95
	職業発見ガイダンス	3.93
	福祉体験(車椅子・アイマスク)	3.78
	副学長講話	3.65
	進路バス見学会	3.98
	社会人講話と職業実習	4.1
	筑波大学見学	3.85
	特別支援学校との交流会	4.3
	進路ガイダンス	3.93
	筑波大学の先生方による講話	3.5
	卒業研究系列内発表会	3.7
ライフ・プラン・クラス内発表会	4.3	

どれも高い数値を記録したが、○印を付けた項目が特に高かった。コミュニケーション・キャンプ、交流会、ライフ・プラン、クラス内発表会が本校生徒の自己を見つめる心と与える影響の大きさを改めて確認した。進路適性検査・職業適性検査、R-CAPが示す客観データもまた自分を見つめる上で一定の役割を果たしていることも確認できた。年間を通して、また、様々な体験を通して、自己を見つめた生徒たちの姿が伺える。

②次の項目は【産業社会を理解する上で参考になりましたか】。該当する番号を選んでください。(159名を対象に調査)

5:大参考になった 4:参考になった 3:どちらとも言えない 2:あまり参考にならなかった 1:参考にならなかった

区分	学習項目	平均値
産理	経済と産業(お金、銀行、株)	4.03
	日銀・東証見学	3.85
	産業のしくみ・会社のしくみ(現代の産業の特徴)	3.93
	産業の課題(福祉的視点、環境保護的視点)	3.85
	環境と産業(産業の発達と環境保持、トレーディング・ゲーム)	4.08
	福祉と産業(福祉の意味)	4
これからの産業(I T化社会)	3.33	

どれもある程度高い数値を記録した。現実社会を理解させるための授業は継続して充実させる必要があると思われる。

③次の項目は【科目や進路を選択する上で参考になりましたか】。該当する番号を選んでください。(159名を対象に調査)

区分	学 習 項 目	平均値
産社	コミュニケーション・キャンプ	3.33
	進路適性検査・職業適性検査	4.05
	菜園づくり体験	3.4
	系列授業見学	4.2
	系列ガイダンス	4.33
	村田兆治先生講話	3.45
	職業発見ガイダンス	4.15
	福祉体験（車椅子・アイマスク）	3.35
	副学長講話	3.45
	進路バス見学会	4.2
	社会人講話と職業実習	4.15
	筑波大学見学	3.8
	特別支援学校との交流会	3.5
	進路ガイダンス	4.2
	筑波大学の先生方による講話	3.4
	卒業研究系列内発表会	3.95
	ライフ・プラン・クラス内発表会	3.78
産理	経済と産業（お金、銀行、株）	3.28
	日銀・東証見学	3.08
	産業のしくみ・会社のしくみ（現代の産業の特徴）	3.45
	産業の課題（福祉的視点、環境保護的視点）	3.43
	環境と産業（産業の発達と環境保持、トレーディング・ゲーム）	3.38
	福祉と産業（福祉の意味）	3.43
	これからの産業（IT化社会）	3.1

- 5：大変参考になった
 4：参考になった
 3：どちらとも言えない
 2：あまり参考にならなかった
 1：参考にならなかった

進路関係の項目、系列紹介に関する項目に高い数値が現われている（○印）。自分を見つめた後、適切な進路を選択させるために進路や系列関係の項目を充実させる必要があることを改めて確認した。

④振り返りの自由作文(300字程度)で【最も印象に残っている項目】を書かせたところ(複数回答あり)、次のような結果になった。

区分	項 目	関係深い系列	選んだ生徒の割合	多くの生徒の印象に残ったもの	選んだ生徒のうち、関連する系列選択者の割合
産社	コミュニケーション・キャンプ		30.19%	○	
	進路適性検査・職業適性検査		15.09%		
	菜園づくり体験	I	27.67%	○	36.36%
	系列授業見学		4.40%		
	系列ガイダンス		10.06%		
	村田兆治先生講話		5.03%		
	職業発見ガイダンス		7.54%		
	福祉体験（車椅子・アイマスク）	III	12.58%		60%
	副学長講話		5.03%		
	進路バス見学会		15.09%		
	社会人講話と職業実習		29.56%	○	
	筑波大学見学		4.40%		
	特別支援学校との交流会	III	42.77%	○	35.29%
	進路ガイダンス		3.77%		
	筑波大学の先生方による講話		8.18%		
	卒業研究系列内発表会		5.66%		
	ライフ・プラン・クラス内発表会		25.16%	○	
産理	経済と産業（お金、銀行、株）	IV	17.61%		42.86%
	日銀・東証見学	IV	15.09%		50%
	産業のしくみ・会社のしくみ（現代の産業の特徴）		6.29%		
	産業の課題（福祉的視点、環境保護的視点）		8.17%		
	環境と産業（産業の発達と環境保持、トレーディング・ゲーム）	I	8.81%		33.33%
	福祉と産業（福祉の意味）	III	6.91%		50%
	これからの産業（IT化社会）	II	3.15%		

交流会が群を抜いて高く、コミュニケーション・キャンプ、社会人講話と職場実習、菜園作り体験、ライフ・プラン・クラス内発表会と続く。そのうち、交流会はⅢ系列福祉保育モデルと関連が深い内容なので、最も印象深かったと答えた生徒のうちⅢ系列選択者の割合を調べたところ、35.29%であった。さらに、菜園作り体験はⅠ系列と関連が深い内容なので、最も印象深かったと答えた生徒のうちⅠ系列選択者の割合を調べたところ、36.36%であった。多少関連系列選択者が多い感はあるものの、それほど強い相関は感じられない。つまりこれらの項目は、他系列選択者にも強いインパクトを与えたことがわかる。逆に、選んだ生徒が少なかった福祉体験では、Ⅲ系列選択者の割合が60%と高かった。また、同様の日銀・東証訪問も、Ⅳ系列選択者の割合が50%と高かった。これらについては、元々その分野に興味のある生徒を引き付けたと考えられる。

(4) 学校生活の分析

今年度は、生徒各人がしっかりと学習に取り組む態度を身につけることを年次の目標としている。学校生活の基本である授業への取り組みは言うまでもなく、自習や課題学習にもしっかりと取り組むことのできる生徒集団、つまり、互いに励まし合いながら向上していける集団作りを目指している。

今年のコミュニケーション・キャンプでは、生徒全員が静かに学習に取り組む「サイレント学習」や、あらかじめ出された課題を確認する「課題確認テスト」を行った。これらの取り組みは、普段の学校生活の中でも継続して行った。

毎朝のSHRでは、5分間の「英単語小テスト」を実施している。このテストは、問題（英単語5つ）があらかじめ示され、それを答えるだけの非常に平易なものである。英単語を覚えさせるというよりは、「遅刻防止」あるいは「5分間静かな時間を確保する」という意味合いが強い。合格点に達しない者および遅刻をした者は当日放課後に居残りをして再試験を受けるシステムになっており、再試験を逃れるため、真剣に臨む者もいると思われる。（ちなみに定期考査期間中は、この時間で「サイレント学習」を行っている。）

本年次の4クラス全体の出席率・遅刻者数（実数）のデータは以下の通りである。

1学期	出席率	99.8%
	遅刻者数(実数)	47
2学期	出席率	99.5%
	遅刻者数(実数)	57

例年、緊張している1学期に比べ、高校生活への慣れを自覚する2学期になると、遅刻者数も増加する

傾向が見られるが、今年度に関しては増加傾向もある程度押さえることができた。「英単語小テスト」の試みは一定の効果があつたと推測される。

課題確認テストは、夏休みは英語・数学・国語の3教科、冬休みについては数学一教科のみ実施した。長期休業前に各教科の宿題を示し、その範囲から休み明けすぐにテストを行うというものである。

生徒が学習に取り組む態度を身につけるための取り組みは、「あしなな」および「C16」の取り組みと連動して行われている。「あしなな」は生徒の基礎学力向上を目指した取り組みで、英検3級、漢検3級、数検3級（本校ではこれらすべてに合格することを「C16(16歳が到達すべき学力)」としている。）の合格を目標に、週2時間行われている。

本年度の検定合格状況は以下の通りである。

	英検3級以上	数検3級以上	漢検3級以上	C16
入学時	51	8	56	0
1学期末まで	59	38	46	23
2学期末まで	7	16	42	27
合計(1月現在)	117	62	144	50

なお、英検3級については1学期、漢検3級については2学期に、未合格者全員が該当検定を受験している。数検3級未合格者は3学期に全員該当検定を受験予定である。

家庭学習に取り組む時間をアンケートしたところ、平均で34分と短かった。また、全く学習していない者も28%もおり、家庭学習の定着という点で課題が残った。

7. 今後の課題

「産社・産理」と年次生徒の実態を様々な角度から検証してきた。今年度も「産社・産理」は生徒達の精神面の健全な成長に十分に寄与し、系列選択・科目選択というゴールへ到達させることができた。その結果、感動を共有できる生徒集団へと高めることができた。しかし、日常的な積極性や物事への問題意識といった生活の実態においては、向上の兆しは見られるものの課題として残っている。さらには、学力向上には欠かせない家庭学習の習慣化や実際のスキルアップもこれからである。2年次、3年次の生活の中で向上していけるよう見守ってきたい。